

学校の概要

大新地区の歴史

和歌山の町は、紀ノ川とともに発展してきた。三千年の昔、河口は遙か東にあって、虎伏山は海中からぬき立ち、海は周辺の山麓を洗っていた。川が運ぶ土砂と海岸の隆起によって吹上砂丘ができ、さらにその西に二里が浜、荒浜、水軒浜が連なるが、なお内海は深く内陸に入りこんでいた。やがて紀ノ川は西の流れを南にかえ、和歌浦の入江にそそぐ間、広瀬の名と同様当地区新町の土地は川の瀬であった。この水路の一部が名前を大門川、鈴丸川、広瀬川、藻屑川、雑賀川、和歌川などと呼びかえられながら残ってきた。

わたしたちの郷土、大新地区の北と西は、この彎曲した 鈴丸川 に接して中之島、北新町、内町、広瀬と橋によってつながり、東と南は宮北、新南と隣接している。

和歌山は古来、風光明媚で、万葉人のあこがれの地であった。しかも南海道の要衝、熊野詣での往環にあった。学校前の 大新通 は、南北に貫いて寺院の間を縫い、大橋から伊勢橋まで往年の熊野路、伊勢路の名残をとどめているのである。

天正年間（1500年代）織田信長、豊臣秀吉の紀州攻めに、名にし負う紀州勢の目を見はる奮戦も今は昔語りとなったが、天正13年（1585年）、秀吉の和歌山城築造に際して、西、伝法から東、鈴丸川にいたる東南の堀川をうがって城の外濠とした。そのころが 和歌山の町の誕生 ということができよう。

慶長5年（1600）浅野幸長入城。このあとをうけて元和5年（1619）徳川頼宣和歌山城に入り、以後城下町として発展していく。

浅野時代、大手門であった岡口門、この東にかかる 大橋 は昔から街道ののど首にあり、遠近の物資が集散する地であった。朝、野菜の集荷、昼は瓦の積み荷、つる物、果物の出入り盛んでまことに繁華な地であったという。今も材木町の名をとどめているように、川べりには製材工場があるが、当時の鈴丸川は重要な物資運搬路であった。和歌山電鐵、貴志川線の前身、山東軽便鉄道が大正5年（1916）大橋、伊太祈曾間に通じ、翌年さらに大橋、中之島和歌山駅間に開通したのも、いずれも大橋を起点としているのである。

寺にちなむ町名ばかりか寺院の多いことも土地がら信仰深い雰囲気をおもわせる。近年にいたって土地の方、市民の方の奇特的な志によって勧請した吉田、東ノ戎、聖天宮さんや公園内の水掛地藏さんも鎮座する。

地区内の各寺院が1500年から1600年代に創建されているのは、当時の 新町、大新の町が城下町として栄えていった時代と符節する。町名のひとつひとつが由緒ある当時の名残をとどめて長い歴史を物語っているが、ここ大新地区は、江戸時代からまことに盛んな商売の中心地であった。

昭和5年（1930）一の橋公園前、東和歌山間に市内電車が開通した。地元の人々の土地提供によって新町橋から新通、中新通を横切った。市内電車は廃止されたが、幹線道路の交通繁く東の玄関口、JR和歌山駅 を控えて当地区の諸産業に果たす役割が、今後もなおまことに大きいものがある。

